

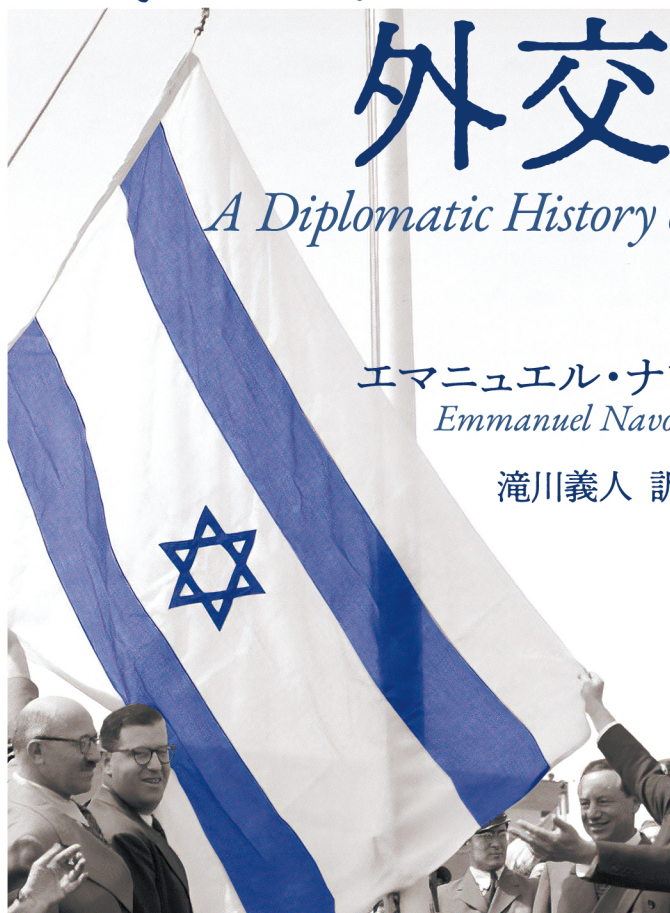
The Star and the Scepter

イスラエル 外交史

A Diplomatic History of Israel

エマニュエル・ナヴォン 著
Emmanuel Navon

滝川義人 訳



人間は不滅であり
その救済は来世にある
国家は不滅ではない
その救済は今か
さもなくば永遠にない

リシュリユー枢機卿

一つの星がヤコブから進み出た。

一つの笏しやくがイスラエルから立ち上る。

——民数記二四章一七節

人間は不滅であり、その救済は来世にある。

国家は不滅ではない。その救済は今か、さもなければ永遠にない。

——リシユリユ—枢機卿

目次

日本語版の発刊によせて 3

緒言——イツハク・ヘルツォグ大統領 8

序 13

第1部 ヘブライ語聖書におけるイスラエルと諸国民 19

第一章 モーセ五書 21

第二章 預言書 33

第三章 諸書 44

第2部 ユダヤ人の外交——古代から現代まで 53

第四章 王国から隷属の身へ 55

第五章 無力と権限付与の狭間で 68

第六章 シオニストの論争 …………… 78

第七章 第一次世界大戦後の国際システム下におけるシオニスト外交 …… 88

第八章 イギリスの委任統治とそのジレンマ …………… 106

第3部 イスラエルの国家再建とアラブ・イスラエル紛争 123

第九章 冷戦初期のイスラエルと中東 …………… 125

第一〇章 周縁戦略とその結末 …………… 145

第十一章 イスラエルとアラブ諸国 …………… 159

第十二章 イスラエルとパレスチナ人 …………… 187

第4部 世界の中のイスラエル 227

第十三章 ヨーロッパのパラドックス …………… 229

	第一四章	友好国アメリカ	256
	第一五章	ロシアの謎	276
	第一六章	アジアへの長い道程	288
	第一七章	アフリカへの道	312
	第一八章	ラテンアメリカのジレンマ	328
	第一九章	国連	338
	第二〇章	ディアスポラの挑戦	349
	第二一章	イスラエルとエネルギーの地政学	364
	結び		373
卷末注			399
参考文献			409
索引			419
訳者あとがき			420

《掲載地図》

地図①	ダビデとソロモンの王国（紀元前 1000~925 年）	57
地図②	ユダヤ独立の崩壊（紀元前 722~586 年）	59
地図③	ハスモン朝ユダヤ王国（紀元前 165~63 年）	61
地図④	熱心党の反乱（紀元 66~73 年）	63
地図⑤	パレスチナのユダヤ人（紀元 636~1880 年）	65
地図⑥	第一次世界大戦前の中東 オスマン帝国	85
地図⑦	サイクス・ピコ協定（1916 年）	109
地図⑧	第一次世界大戦後の中東 国際連盟の委任統治	111
地図⑨	ピール分割案（1937 年）	115
地図⑩	分割決議（1947 年）と休戦協定（1949 年）	137
地図⑪	アルファ計画（1955 年）	143
地図⑫	六日戦争（1967 年）後のイスラエル支配地域	169
地図⑬	イスラエル・エジプト間の再配備協定（1975 年）	181
地図⑭	暫定合意（1995 年 9 月 28 日）	199
地図⑮	キャンプ・デービッド提案（2000 年）	205
地図⑯	クリントン案（2000 年）	209
地図⑰	撤退計画（2005 年）	217
地図⑱	オルメルト案（2008 年）	219

緒言 ——— イスラエル国大統領イツハク・ヘルツォグ

シオニズムが比較的近代の政治思想であるとしても、ユダヤ人の外交活動は、イスラエル建国の数千年前から、様々な形で見られた。この外交活動の基本には、ユダヤ民族が存続し繁栄していくためには、神の恩寵にすがらるわけではなく、

諸国民の善意次第という思考を否定する前提がある。ナヴォン博士が本書で生き生きと描写しているように、ユダヤ民族は、バビロニア捕囚の時代から、目の前の目的を果たして生き延びるため、世界の諸国民と外交関係を結び、発展させる術を身につけていたのである。

私の見解では、歴史の黎明期から今日に至るユダヤ人外交の展開と進化を語る人は、エマニュエル・ナヴォン博士をおいて他にない。ナヴォン博士はフランス出身であるが、自らアリヤー（イスラエルへの帰還）を実行した人物であり、イスラエルに対する愛を行動と精神で表明した。博士は、イスラエルの外交政策全般、そして特にイスラエル・ディアスポ

ラ関係に対する情熱を高めた人物である。先ずイスラエルで学術上の研究を修了し、国際関係の分野で、世界的に知られる専門家になった。

本書でナヴォン博士は、様々な歴史物語や逸話を通し、説得力のある筆致で、ユダヤ民族存続の要のかなめ一部が、常に外交活動にあったと指摘する。聖書時代から離散、そして主権国家に至る民族復活に繋がる糸を、深い洞察力をもってたぐっていく。

ユダヤ人の外交は、書の民（ユダヤ民族の別称）のユニークな性格をベースとしている。すなわち、機敏性である。それは、社会的かつ政治的变化に対する迅速な適応、そして千年を見通す歴史的視野である。

ユダヤ人は民族の郷土に帰還し、軍事力のお陰だけでなく、地政学上の理解と世界中の国家との外交関係の樹立、さらには自己の大義の正当性に対する確固とした信念のお陰で、安

定し繁栄する国を築き上げた。

ユダヤ民族は、政治的手腕と外交力の面で非凡な人材を生み出してきた。それに該当する人物のうち四名が、本書の中で紹介されている。最初の人物が、私の祖父ラビ・イツハク・ヘルツォグである。英委任統治領パレスチナから独立後のイスラエルまで（一九三六～一九五九）、初代主席ラビだったラビ・ヘルツォグは、ユダヤ民族史上恐らく最も悲劇的かつドラマチックな時代に、精神的な存在以上の働きをした人物だった。ユダヤ人の救出とイスラエルの地における国家主権確立を目的に、実に非凡なやり方で国家なき民族の外相として行動した。英委任統治下では、マクドナルド「白書」の意図する制限に抵抗した。ナチスの殺人機械を止めようと奔走し、世界のリーダーや国家元首そしてローマ教皇にもかけ合った。戦後は、ホロコーストで生き残ったユダヤ人を聖地へ移送する役割を担った。

二人目の外交官は、故人となった私の父親、つまりラビ・ヘルツォグの息子ハイム・ヘルツォグ第六代イスラエル大統領である。その職務につく前、ハイムは国防軍の職務（情報部長を含む）や国連大使など様々な公的地位にあった。国連大使時代、彼は「シオニズムは人種主義の一形態」という決議など、イスラエルの存在を否定する行為と戦った。

ナヴォン博士は、私の父がこの決議に、ユダヤ民族に対する大戦以来最初の国際的攻撃を見たときと本書に記している。一九七五年一月の国連総会で、父は力強い演説に続いて、この決議文を堂々と破り棄てた。有名な話である。本人の父親は、ほぼ四〇年前公衆の面前で、マクドナルド白書を破り棄てている。

私の家族から出たもう一人の外交官が、私の父の弟、私の叔父に当たるヤコブ・ヘルツォグ博士である。彼は首相府長官時代に死去したが、イスラエル独立の前から外交分野で活動し、外務省時代には駐カナダ大使（一九六〇～一九六三）などの様々な役職についた。イギリスの歴史家アーノルド・トインビーは、イスラエルの建国に反対し、ユダヤ人兵をナチスと同列に置いて論じることさえした人物であるが、公に論争を挑んだのが叔父だった。トインビーがヘルツォグ博士の説得力ある議論に引き下がったのは、有名な話である。

今日でも私の伯父アバ・エバンは、イスラエル最高の外相、イスラエルの外交政策に今も影響を与えてきた人物と考えられている。エバンは、駐米イスラエル大使、国連大使（兼任）など様々な役職につき、一九六六年から一九七四年まで外相として活動している。エバンは、イスラエルの独立のために、在米ユダヤ人社会の支援を積極的に求めた人物として

記憶されるであろう。彼には、イスラエル国家とアメリカユダヤ人社会の關係の重要性を感じし、これを強める知恵があった。この關係性は、ユダヤ民族の将来のためだけでなく、イスラエルとアメリカの結びつきの上でも意義深いことだった。世界で最も強力かつ関与度の高いユダヤ人コミュニティは、アメリカ・イスラエル關係に決定的な影響力を有するのである。

私は、この遺産を受け継ぐという決意を抱き、ユダヤ機關の会長に就任した。特に、ユダヤ民族の未来に対する責任と、イスラエルと在米ユダヤ人社会との亀裂に関する懸念から、私の決意は固かった。前任者たちが分裂を阻止しようとした努力を心に留め、彼らのたどった道をしっかり守る責務を感じたのである。イスラエルとディアスポラのユダヤ人社会の結びつきが、ユダヤ民族の未来に影響する。さらにそれは、

イスラエル国家、諸外国との關係、そして国家の安全に影響する。だからこそ私は、結びつきの修復、対話の促進、事実をねじ曲げる情報工作への対処、そしてイスラエルの存在権を確固として守ることを目的に行動してきたのである。

『イスラエル外交史』は、該博な歴史的知識を示しているという点で、魅力ある内容になっている。しかし、それを読むのは、単に歴史通になるということではない。本書は、ユダヤ民族の命運に関心を持つ人、民族が手にした勝利だけでなく、犯した誤りからも教訓を得ようとする人にとって、必読の書である。本書を読むことによって、ユダヤ民族の特異性に関してさらなる教訓を学び、そしてそれが、私たちに、自分の民族の未来を保障するため、何世代にも及ぶユダヤ人外交のたどった道を守る義務を、思い起こさせてくれるのである。

序

一八世紀のジュネーブの思想家ジャン・ジャック・ルソーは、ユダヤ人の歴史に対する困惑を次のように表明した。

ユダヤ人は我々に驚くべき情景を提示する。……アテネ、スパルタ、ローマはいずれも滅び、その子らは存在しない。シオンは破壊されたが、子らを失わなかった。……征服に對する不屈の精神、離散、革命、追放に耐え、慣習と律法を失わず、……あらゆる国と交わるが、その中で決して消滅することはなかった。……このような奇跡の作用を可能にしたのは何か。……人は誰であろうとも、これを特異な驚異と認めなければならない。この要因が神によるものであれ人為的なものであれ、研究と賢者の賞讃に値する。^{*1}

本書は、ルソーのアドバイスに従い、ユダヤ民族の外交史を研究する。イスラエルの古代王国から今日の現代イスラエ

ル国に至る、多年に及ぶ諸国民との相互作用を^{さかのぼ}遡って調べ、解明する。

このような努力は、必要であると同時に野心的でもある。イスラエルの外交政策に関する書籍は、当然のことながら、一九四八年のイスラエル独立から始まる。しかしそうすることによって、ユダヤ人の奥行きと幅のある視野を欠くものになつてゐる。さらにこの種の書籍は、イスラエルの外交政策で特定の側面に偏る傾向がある。最も典型的なのが、アラブ・イスラエル紛争やアメリカ・イスラエル関係である。イスラエルが独立して七〇年あまり、最新情報と総合性を有するイスラエルの外交政策書がなかった。本書は、その空白を埋めるために書かれた。

イスラエル外交史を書くのは、その歴史のユニークさの故に複雑な作業である。紀元七〇年にローマ帝国がユダヤ人の主権国家を破壊した後、連綿としてユダヤ民族が生き残っ

たことは、まさに驚くべきことであり、常識を超えている。ルース・ウィッセ教授の言葉を借りれば、ユダヤ人は「歴史的可能性に公然と反抗する英雄譚の復活した子供たち」である。^{*2} イギリスの歴史家アーノルド・トインビーは、説明のつかないユダヤ人の生き残りをどうしても理解できず、ユダヤ民族を表現するのに「化石」という言葉を使った。二〇世紀になって、ユダヤ民族の国家再建の事態を目の前にしたトインビーは、答えに窮して「自動車の氷結を溶かすことができるように、ユダヤ人は化石状態から解かれたのである」と渋々認めた。^{*3} 「氷結の溶けた車」は、今や繁栄する押しも押されぬ国になった。「化石」が甦ったのである。

外交史は、国の政治家の識見と手腕の問題である。しかしユダヤ人は、三〇〇〇年の歴史の中で、その三分の二の期間は国家のない状態であった。古代ユダヤ人は一〇〇〇年ほど主権国家のもとにあった。すなわち、統一世襲君主時代（紀元前一〇五〇〜九三〇年）、イスラエル王国の時代（紀元前九三〇〜七二〇年）とユダ王国の時代（紀元前九三〇〜五八六年）、バビロニア帝国（紀元前五八六〜五三九年）とアッシリア帝国ペルシア（紀元前五三九〜三三二年）およびギリシア帝国（紀元前三三二〜一四〇年）の各帝国時代のユダヤ地方省、ハスモン朝（紀元前一四〇〜三七七年）、ローマ帝国時代（紀元前三七〜紀元七〇

年）のユダヤ地方省である。紀元一三五年のバルコフバの反乱に対するローマの容赦ない弾圧に伴い、ユダヤ人は国家を失い、離散した。しかしながら離散の地にあっても、ユダヤ人の指導者は、ユダヤ人の権益を守るため、国の元首と交渉した。一五世紀、スペインのユダヤ人学者で財務家のイツハク・アバルバネルは、自分の資産を使い、アルジア（モロッコ）のユダヤ人たちを奴隷の身から解放し、レコンキスタ（国土回復運動）時代、スペインの国王に多額の金を融通した。アバルバネルは、ベニスに定住（一五〇三年）した後、ベネチア共和国とポルトガルの通商協定を交渉し、成立させた。一六五五年、ポルトガルのユダヤ人学者で外交家のメナシエ・ベン・イスラエルは、オリバー・クロムエル護国卿を説得し、ユダヤ人のイギリス帰還を認めさせた。一八四〇年、ダマスカスでユダヤ人に対する血の中傷事件、いわゆる「ダマスカス事件」が起きた時、フランスの政治家アドルフ・クレミュー、イギリスの財務家ロスチャイルド家などヨーロッパの政治家や財務家たちは、トルコのスルタンにやめさせるよう圧力をかけ、それぞれ本国政府を説得した。一九世紀、ロスチャイルド家は、大英帝国が抱える外交上の諸問題の解決に寄与した。例えばクリミア戦争（一八五三〜五六年）の戦費調達、スエズ運河株式買収（一八七五年）の費用調達がある。イギリ

スの首相を務めたベンジャミン・ディズレーリは、ユダヤ人としての自らの出自を誇りとし、イスラエルの地におけるユダヤ人の民族復興を主張した。一八九七年にテオドール・ヘルツェルによって組織されたシオニスト運動は、イスラエル国の建国に先立ち、その指導者たちを外交官に変えた。シオニスト活動家たちは、ユダヤ人の古の郷土いじよにユダヤ人国家の建設という構想の支持を求めて、世界の指導者たちに働きかけた。言い換えれば、ユダヤ民族の歴史には、ユダヤ人が主権を持つ期間が短かったにもかかわらず、「ユダヤ人の外交活動」は存在した。そしてそれは、本腰を入れて取り組まなければならない研究課題なのである。

本書について

本書は四部に分かれている。第一部「ヘブライ語聖書におけるイスラエルと諸国民」は、モーセ五書(第一章)、預言書(第二章)、諸書(第三章)の評釈的読み方を通して、「イスラエルと諸国民」の課題を分析する。古代イスラエル王国の外交政策については、ヘブライ語聖書から学ぶことがたくさんある。さらに私は、ヘブライ語聖書の基本的知識がなければ、イスラエルと世界の相互作用は理解できないと信じている。ユダヤ人の心は、ユダヤ教の形成記録とユダヤ人の民族帰属意識

によって作り上げられ、今なお影響を受け続けている。「独り住む民」、アマレクとの永遠の敵意、あるいはメシア出現による救済といった概念は、聖書の知識がなければ理解できない。この一連の概念は、ユダヤ人が自己認識として持つ歴史的作用や、他の諸国民との相互作用と絡み合っている。聖書学者ジョン・レベンソンは、ユダヤ史研究の中で「全体的な真相は、伝統的な記憶作用や現代の批判的な歴史記述だけでは掴みきれないほど大きい」と述べている。^{※4}

第二部「ユダヤ人の外交——古代から現代まで」は、次の時代区分を含んでいる。すなわち紀元七〇年、ローマによるユダヤ地方の破壊に至ったイスラエル古代王国の外交政策(第四章)、中世から解放に至るヨーロッパにおけるユダヤ人ディアスポラの外交(第五章)、一九世紀後半のシオニスト運動の勃興と国際支持を求める努力(第六章)、第一次世界大戦後の国際システムにおけるシオニストの外交活動(第七章)、そして一九三〇年代から第二次世界大戦時に至るシオニスト指導部の抱える外交政策のジレンマ(第八章)である。

第三部「イスラエルの国家再建とアラブ・イスラエル紛争」は、再建を歓迎しない中東でのイスラエルの独立と生存闘争を扱う。冷戦初期のイスラエル外交政策のジレンマ(第九章)、敵意に満ちた中東で同盟関係を築くイスラエルの努力(第一

○章、アラブ諸国との戦争と和平合意(第二章)、パレスチナ人との未解決の紛争(第二章)を調べる。

第四部「世界の中のイスラエル」は、一九四八年から現代に至るイスラエルの外交政策を解説する。対象は地域と組織との関係である。すなわち、ヨーロッパ(第三章)、アメリカ(第四章)、ロシア(第五章)、アジア(第六章)、アフリカ(第七章)、ラテンアメリカ(第八章)、国連(第九章)、ディアスポラ(国外ユダヤ人社会、第二〇章)である。最終章(第二二章)は、エネルギーに起因する地政学的変化によって、イスラエルの外交関係と立ち位置がどのように変わりつつあるかを扱う。

本書は、多様な話題と長い期間を扱っていることから、必ずしもすべてを網羅してはるわけではない。むしろ中心的観念あるいはテーゼが、この歴史調査から浮かび上がってくる。すなわち、ユダヤ人が生き残り、成功を収めることができたのは、強い歴史的使命感と、その使命を現実世界に絶えず適応させてきたお陰という点である。

この概念は、聖書の二つの書によって要約されている。一つ目は民数記の「一つの星がヤコブから進み出た。一つの笏がイスラエルから立ち上がる」(二四・一七)である。ここから二つの疑問が生じる。(1)ヤコブが名前をイスラエルと変え

られたのに、なぜ二つの名前が聖書に引き続き交互に登場するのか。同じ節の中に二つの名前が出てくる場合もある。(2)星と笏は何を意味するのか。創世記には、ヤコブを「穏かで、天幕の周りで働くのを常とする」と述べ、双子の兄エサウを「巧みな狩人で野の人」と記述する(創世記二五・二七)。言わば前者は(古代文明の)アテネ人、後者は(剛胆な)スパルタ人だが、個々はいずれも、アブラハムとイサクの精神的な遺産を継承するのに必要な資質、すなわち信仰と力を兼ね備えていない。ダビデの星はユダヤ人の信仰を象徴し、笏は力のシンボルである。ヤコブは信仰を持っているが、力を欠いていた。彼は、現実の世界で戦う能力と意志のあることを証明した後、イスラエルと名前を変えられるのである。しかし、昔も今も信仰と力のバランス行爲が、当然のこととして受け止められることはなく、常に試験にさらされている。だからこそ、ヤコブとイスラエルの名前が交互に使われるのだろう。

リシュリユー枢機卿は、「人間は不滅であり、その救済は来世にある。国家は不滅ではない。その救済は今か、さもなれば永遠にない」と言った。この言葉は、ユダヤ人の視野から見たものではないが、信仰と力のジレンマに関わる警句である。リシュリユーは神父であると同時に政治家であった。カトリック教会の高い地位にある人間として、カトリックと

プロテスタントの三〇年戦争ではカトリック教会側につくはずだったが、彼は神聖ローマ帝国を弱体化させ、ヨーロッパ大陸におけるフランスの支配圏を確立するため、プロテスタント側に味方した。彼は、神学上の選択よりも国家的関心 (raison d'État) を優先したのである。それどころか、自身を正当化する公式すら生み出した。政治家というのは、自らの魂だけでなく、国の存続と繁栄にも責任を有するので、信仰と力を分ける以外選択の余地はないというのである。この論理的なねじれによって、リシュリユーは法衣をまといながら、無慈悲でシニカルであり得たのである。

外交とは、理想と政治的現実主義、原理原則と利害、それぞれの妥協の絡み合いである。この点において、イスラエルの外交も例外ではない。しかし、イスラエルの外交史はユニークである。この希有な歴史から教訓を引き出すことが、イスラエルの未来を保証するための前提条件である。